

牛道春秋

駐在妻の欄

▼年末、子供たちが主人の実家へ御年玉を貰いに行きました。▼今までは義両親に犬山駅まで迎えに来てもらい、子供達を電車で連れていってもらっていたのですが、今回は初めて子供たちだけで電車に乗せることにしました。▼心配性の義母が「大丈夫かな大丈夫かな。」と心配するので「五年生にもなれば大丈夫です！」とピシヤリと言いい切りました。▼「そんな風に甘やかすから、あなたの息子は・・・。」という言葉は、寸前のところで飲み込みました。▼結局、子供たちは何の問題もなく帰省することが出来ました。▼年の瀬を主人と二人きりで過ごしながら「こうやって段々と手が離れていき、そのうちクソバアとか言われるんだらうな。」と感傷に浸りながら、梅干を浸した焼酎お湯割りを啜りました。▼主人は、コタツに入りながら後のせサクサクの緑のたぬきのだし汁を美味しそうに啜っていました。▼そして、そのままコタツで眠り年明けを迎えていました。